

三重中学校による、地域の専門家とネットワークを形成して行った 干潟の総合学習の実施と科学部の活性化 ～地元の干潟を地元の子供たちが調査をする～

梅村学園三重中学校・高等学校
小西 伴尚

1. 三重中学校で行ってきた取り組み

近年「理科嫌い」「理科離れ」が大きな問題になっている中、2005年より多数の理科のプログラムを立ち上げた。

*外部連携による特別授業

大学等：東京大学生態水文学研究所，京都大学総合博物館，中京大学理系施設および体育施設，ほか多数。(JSTのSPPなどの助成を活用)

ボランティア団体：矢作川水系森林ボランティア協議会，松阪・松名瀬再発見プロジェクトなど。

*本校の教員指導による取り組み

自由研究作成および発表，1・2年生に点描画作成，環境作文作成，夏季合宿にてクラス毎に理科教員1人配置し自然観察授業実施，週4回の理科授業のうち2時間を連続授業実施。

2. 海の実習の実践の始まりとネットワーク形成

2008年11月，中部ESD拠点総会において本校の発表した際に，地元の松名瀬干潟の自然を守りたいと考えている「松名瀬ウォッチングボランティア」，松名瀬の地域研究をしたい「三重大学」，漁業者の持続可能な利用促進をしたい「三重県水産資源室」，科学的興味関心を高めたい「三重中学校」が出会い，それぞれの想いを語り，共同で活動することで，お互いの目標を高められると考え，関係者で2009年にNPO 松阪・松名瀬海岸再発見プロジェクトを立ち上げ連携が始まった。何事にも参加し，出合いを大切にすることが大切。

3. 海の総合学習

2009年より，毎年1学年生徒全員を対象に実施。工夫した点は，①各クラス別にローテーションで全4講座を受講する形で設定。②講座の講師は，

さまざまな立場の専門家として，地元で活躍する大学の研究者，漁業者，行政の研究者，ボランティアにお願いし，講座以外にも，地元自治会，国土交通省，市役所の方々にお話を聞く時間を設定。③実習の最後に海岸清掃を設定。

2011年に意識調査(アンケート)を行った結果，94%の生徒が「面白かった」と答え，96%の保護者が今後も特別授業に参加させたいと答えた。

4. 科学部の活性化，変革

2006年度にほぼ休部状態だった科学部を改革し，松名瀬での長期生態調査を行うようになり，20名ほどの生徒が活発に活動している。大切だと考えていることは，①生徒が出来ることは生徒がする。実験の計画，準備，後輩の指導などは生徒が行い，外部講師のコーディネートや実験器具の予算・安全確保等を教員が行っている。②待つ。部員の質問に対し，直ぐに顧問の答えや指示を出すわけではなく，子供達で考えさせたり，調べさせたりする。③外部と関わる。専門的な指導を受ける。④生徒が講師をする。地元の小学生，子供会，市民団体に対して生徒が計画運営をして観察会を実施。責任感が生まれ，あやふやな知識を正すために自分達で学習するとともに，伝えるためには何をすればよいのか考えるようになった。

学会やJSTの中高生の科学部振興事業での好事例発表をはじめとして，多方面で評価されている。



